



第2回淀川河川敷フェスティバルにて(2003年10月11日)[写真提供=辻川さん]

外にも内にも「いつも一生懸命。私流」

大阪市生涯学習推進員協議会委員長

第12回大阪生涯学習フェスティバルが、梅田の大阪市立総合生涯学習センターをメイン会場に、各施設で11月24日まで開催中だ。バラエティーに富んだ催しのひとつに、毎年多くの参加者と見学者を集めている「大阪市生涯学習ルーム活動交流会」がある。

市内295校の小学校の特別教室等を活用し、地域の生涯学習の場として、さまざまな学習活動を行ってい

る「生涯学習ルーム」。ルームで学ぶ人達にとって、フェスティバルは日ごろの活動の成果を、ステージや作品展示の形で発表し、合わせて交流の輪を広げようという、年に1度の“晴れ舞台”でもある。

舞台発表の部は、11月1日、大阪市立こども文化センターを会場に沖縄舞踊や民謡、コーラスのほかダンス、ゴスペルなどが披露され参加者を楽しませた。一方、作品展示の部

は、総合生涯学習センターを会場に手芸、陶芸、書道、絵手紙など学習者の成果を示す力作を展覧。会期は3期に分かれており、現在は第1期を開催中(11月10日現在)で、11日まで。第2期は12日~17日、第3期は19日から24日までとなっている。

この作品展示の部の中に「1日チャレンジコーナー」と「手づくり市コーナー」があり、参加者の人気を集めている。いずれも大阪市生涯学習推進員協議会が運営しているコーナーで、同協議会の委員長が、辻川松子さんである。

「1日チャレンジコーナーはビーズクラフトや中国結びの携帯ストラップ、手芸小物など、生涯学習ルームの教室で行われているものを体験していただくという催しですが、とても人気があります」と辻川さん。

プロフィール 辻川 松子(つじかわまつこ)さん

1949年、兵庫県尼崎市生まれ。73年、結婚を機に大阪府淀川区に居住地を移し、大阪市民となる。ボランティア活動は、夫と子どもの2代が通った幼稚園の母の会が始まり。以後、86年から淀川区PTA協議会副会長や、大阪市PTA協議会副会長をはじめ第1期ウイメンズパネル委員、大阪市の地域医療審議会、学校適正配置審議会の各委員や婦人会館、子ども文化センターの運営委員なども兼務。88年に野中小学校、91年には十三中学校のPTA会長に就くなど活躍。生涯学習関係では94年に第1期大阪市生涯学習推進委員の委嘱を受け、96年に同推進委員協議会委員、01年には同副委員長を経て今年5月、委員長に就任した。

また「手づくり市は、学習ルームで作る作品を展示即売するもの。今年で4回目になりますが、とっても素晴らしいものが出てまいりますし、楽しみなコーナーですよ」と目を細める。

第1期の生涯学習推進員 今年5月、新委員長に

辻川さんが委員長を務める生涯学習推進員協議会とは、大阪市生涯学習推進員の団体である。

大阪市の小学校に、生涯学習ルームが開設されたのは平成元年のこと。297校中12校でのスタートだった。「当時はそれこそ、生涯学習とは何ぞやという時代でしたが(笑)、ルームの数が増えるに従って、学校と地域、学習ルームとの潤滑油になる担い手を養成する必要性が認識されるようになり」平成5年、生涯学習推進員の養成講座がスタートする。

受講生は約70人。半年間のカリキュラムをほぼ全員が修了し平成6年4月、第1期の生涯学習推進員が誕生した。辻川さんも第1期生のひとりである。ちなみに現在の推進員は、963人を数えており、第10期生として約160人が受講中だ。

連絡会をまとめる生涯学習推進員協議会が発足したのは、推進員誕生の2年後だった。

ところで、新委員長の辻川さんが

課題としているものに、「講座内容の充実」がある。ひとつは、学校の完全週5日制を迎えている子どもたち、高齢者や若い人達が参加できる余暇時間を総合的に考えた上での「みんなが集える講座」の実現だ。もうひとつが「行かなくても学べる講座」である。「今は情報時代です。学習ルームを核に情報発信し、学習者は家にいて学べる講座を新たな事業として考えたい」と穏やかに語る。

母の会が起点 理解ある家庭にも恵まれ

兵庫県尼崎市で生まれた。未熟児だったため、病院通いばかりか何度か入院さえ強いられる幼少時代。それでも、中学校から高校時代にかけてはコーラス部の部長として、県レベルのコンクールにも参加している。

一方で、高校在学中から専門学校でタイプを学習。また卒業後も洋裁や料理を習った。「現在で言う生涯学習ですね。習い事は好きでしたし姉たちもそうでしたから、楽しい思い出です」と辻川さん。

結婚して大阪市淀川区の住民となり、2人の子どもに恵まれる。ボランティアとの出会いは、子どもの通う幼稚園で、母の会の会長に推挙されたことだった。以後、小学校、中学校と連続してPTA会長に。ボランティア範囲も、区から市へと広がるこ

とになる。

この間、並行して学校適正配置審議会委員や第1期ウイメンズパネル委員などを歴任。生涯学習推進員となって以降も、大阪市子ども文化協会会長など多数の要職をこなしている。

こうした多忙な活動を支えている要素の一つが、家庭だろう。結婚した当時は、夫と義母、夫の妹との4人家族だった。子どもが生まれ、幼稚園の母の会を起点に出かける機会が増えるのだが、義母はもちろん、結婚するまで3年間同居した妹も、快く送り出してくれたという。

辻川さんが「会社人間」と評する夫も、「子どもと朝風呂に入ってコミュニケーションを図り、休日には朝食を作るなどして」協力。成長した子どもたちは、「義母が寝ついたときにも嫌がるのではなく、反対に私をサポートしてくれるほど」の優しい心を育てていたという。もちろん、辻川さん自身が「短い時間でも中身を」という、強い気構えの日常行動を取っていたことが、家族の理解を得る結果を生んだことは言うまでもない。好きな言葉は、と聞かれて辻川さんが答える「いつも一生懸命。私流」の意味が、実は外(ボランティア)のこと以上に、自分の家庭に向けられた感謝の気持ちの現れ、というのうがちすぎだろう。

協議会委員長としての役職のかたわら、講師の助手役として大正琴を子どもたちに教えてもいる辻川さんは、生涯学習のすばらしさを「知らない部分が見えてくること」と表現する。「学習ルームでは育ち方や年齢、考えの違う人たちと出会えるのです。それが値打ち」。そのうえで、「まず覗いてみて、参加してみることから始めれば」とアドバイスする。

今も、検査の数値は良いとは言えないが、「症状が出てきたらその時のこと。でも忙しくしているのに、それが苦になっていないのは忙しさが薬かなと(笑)。そういう意味でもボランティアは人のためじゃなく自分のためにしているのだなあ、しみじみ思います」と話していた。

(文・脇本 勤 / 写真・高島悠介)



ルーム講座「おかしづくり教室」にて [写真提供 = 辻川さん]